

北海道新幹線等新交通体系と観光資源の利活用に関する  
調査特別委員会報告書

令和元年9月25日第3回定例会において設置された当特別委員会が、これまで調査した結果を下記のとおり報告する。

令和 3 年 2 月 2 2 日

七飯町議会議長 木 下 敏 様

北海道新幹線等新交通体系と観光資源の  
利活用に関する調査特別委員会  
委員長 田 村 敏 郎

記

1 調査の経過及び内容

(1) 令和元年9月25日に第1回目の委員会を開催し、委員長に田村敏郎委員、副委員長に川村主税委員をそれぞれ互選した。

(2) 令和元年11月19日に第2回目の委員会を開催し、今後の調査、研究の進め方について協議を行った。

はじめに、町の観光資源について協議を行い、①赤松街道の利活用、②函館新幹線総合車両所の活用、③道の駅周辺の振興、④大沼国定公園の振興、⑤城岱牧場の利活用の5項目を中心に調査を行うこととした。

資料要求は、赤松街道・大沼国定公園の歴史に関する資料、函館新幹線総合車両所に関する資料、北海道縦貫自動車道に関する資料、観光入込客数に関する資料、道の駅なないろ・ななえの入込客数、売上に関する資料とした。

次回の委員会において、これらの資料に関する説明の聴取を行うこととした。

- (3) 令和2年1月14日に第3回目の委員会を開催し、総務部長、政策推進課長、経済部長、商工観光課長、生涯教育課長、生涯教育課学芸員の出席を求め、提出のあった資料に基づき説明の聴取を行った。

生涯教育課学芸員から赤松街道の歴史及び大沼国定公園の歴史に関する説明、政策推進課長から函館新幹線総合車両所、北海道新幹線の札幌延伸の状況、北海道縦貫自動車道の現状、北海道縦貫自動車道、北海道新幹線建設促進に関する渡島総合開発期成会などの要望書に関する説明があった。

委員からは、函館新幹線総合車両所の一般公開の見通し、北海道縦貫自動車道の七飯インターチェンジ（仮称）から函館新道までの計画等についての質疑があり、函館新幹線総合車両所の一般公開については、施設を公開することや研修を受け入れる構造になっていないこと、交通アクセスの関係で現状では難しいとのことである。また、北海道縦貫自動車道については、当該区間の計画についてはまだ示されていないとのことである。

次に、商工観光課長から観光入込客数及び道の駅なないろ・ななえの売り上げに関する説明があった。

委員からは、観光客の誘客に向けた七飯町の魅力発信の考え方及び南大沼駐車場について質疑があり、七飯町には、自然を活用したアクティビティなどの魅力があることから、これらの情報をさらに発信して、より多くの方に来ていただくように取り組んでまいりたい。さらに、今後の考え方の一つとして、七飯町のみならず道南地域で協力して広域的に誘客に取り組んでまいりたいとのことである。また、南大沼駐車場については、地元としても大きな影響が出るような事案については、北海道などと十分協議して、地元の不利益にならないように対応していくことが重要であるとのことであった。

以上の説明及び質疑を踏まえ、次回の委員会において、現地調査を行うことを決定した。

- (4) 令和2年2月10日に第4回目の委員会を開催し、大沼国定公園内で開催された体験イベント（アイスカルーセル（凍った湖面を円状に切り抜いて、湖面に浮かんだ円状の氷を回転させる氷のメリーゴーラウンドのことをいう。）、南大沼駐車場、道の駅なないろ・ななえ、赤松街道等の現地調査を行った。

(5) 令和2年5月28日に第5回目の委員会を開催し、2月10日に行った現地調査や現在のコロナ禍を踏まえた今後の検討事項について協議を行った。

委員からは、コロナ禍において海外からの観光客の誘客が難しい中、地元の人を訪れる身近な散策の場としての大沼をもう一度見直すという目線に立脚することが必要ではないかとの意見があった。そのため、次回の委員会で再度大沼国定公園等の視察を行うこととした。

(6) 令和2年6月16日に第6回目の委員会を開催し、冬期間には現地調査ができなかった東大沼キャンプ場、城岱牧場展望台について、夏期の観光状況を把握するため、現地調査を行った。

(7) 令和2年10月19日に第7回目の委員会を開催し、北海道縦貫自動車道の工事の進捗状況を把握するため、北海道縦貫自動車道大沼トンネル避難坑工事の峠下工区、西大沼工区の現地調査を行うこととした。

(8) 令和2年10月30日に第8回目の委員会を開催し、北海道縦貫自動車道大沼トンネル避難坑工事の峠下工区、西大沼工区の現地調査を行った。

現地調査終了後、北海道縦貫自動車道の開通を見据えた今後の峠下地区に関する町の考え方について質疑があった。町は、北海道新幹線が札幌まで延伸し、北海道縦貫自動車道が完成すると、峠下地区というのが道南の交通の要衝となり、これから七飯町発展の一つの要になる地区であると考えている。また、北海道縦貫自動車道については、計画路線というのが示されていない中では、示される前に町としても要望してまいりたいと考えている。その際には、議会とも連携をして、町全体としての要望活動ができるのが一番ではないかと考えているとのことであった。

(9) 令和3年2月1日に第9回目の委員会を開催し、報告書に記載する事項の確認を行った。

(10) 令和3年2月22日に第10回目の委員会を開催し、令和3年第1回定例会に提出する報告書のまとめを行った。

## 2 まとめ

以上がこれまでの調査活動である。

はじめに、北海道縦貫自動車道に関しては、七飯インターチェンジ（仮称）までの開通によって、峠下地区が道南地区の交通の要衝になると考えられる。一方で、現時点では七飯インターチェンジ（仮称）から函館新道までの区間の計画路線が示されておらず、峠下地区をはじめとした町内への誘客という観点から考えると、計画路線が示される前に町と議会が連携して、道の駅周辺の振興を考えた要望等を行う必要がある。

次に、観光資源のあり方については、町内の観光資源のうち5項目に焦点を絞って調査を行ってきた。新型コロナウイルス感染症の影響により、十分な調査活動を行うことができなかったが、当町の観光資源の中で最も重要である大沼国立公園や東大沼キャンプ場に関しては、訪れた観光客が素晴らしい景観と行き渡った管理・サービスに満足し、リピーターとなってくれるような公園づくりが不可欠であり、北海道や町の動向を注視したい。

また、これまでの町の観光施策は、インバウンドなどによる観光客の誘客が主なものであったが、当特別委員会としては、このコロナ禍により観光が団体から個人へと移行している状況下で、地元の方に身近に訪れてもらえる観光地という視点で現状の把握に努めた。今後は、近郊に住む方を含めた多くの観光客に訪れてもらえるよう、地元で活動する方々との意見交換等を通じて、共に観光を盛り上げ、地域振興を促すという長期的な戦略を取り入れることも必要である。

新型コロナウイルス感染症が収束していない現状を踏まえると、「新北海道スタイル」に基づいた地元の受入体制の拡充により、近郊に住む方を含めた多くの観光客が気軽に訪れることのできる七飯町として、広く魅力を発信していくことを望み、当特別委員会の活動報告とする。

※新北海道スタイル：新型コロナウイルスとの闘いが長期化している中、国が示した「新しい生活様式」の北海道内での実践に向けた新しいライフスタイルやビジネススタイルをいい、事業者に取り組んでいただきたい項目として「7つのポイント プラス1」を掲げている。